

# 和紙だより

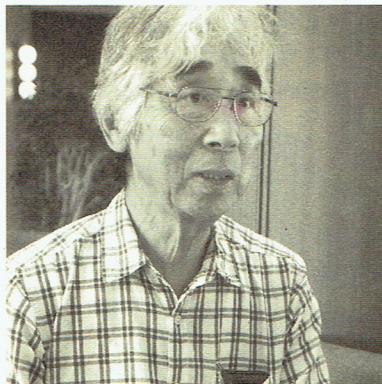
## 目次

越前和紙への提言 江南和幸さん	1
工房紹介 韓紙工房「コムコミ」	2
取組紹介 抗ウィルス漆喰和紙「和蔵紙」の開発	3
和紙ミニコーナー 情報欄	4

## 越前和紙への提言

### ■江南 和幸(えなみ かずゆき)

1940年東京都生まれ。大阪大学工学部で金属の結晶構造を研究。助教授を経て、1990年より龍谷大学理工学部教授。同名誉教授。龍谷大学に残る大谷探検隊が持ち帰った敦煌文書の調査を機に、紙の研究に入る。以降、最新機器を使用した科学的観察、植物学などの観点から、古典籍の紙の出自や様相を明らかにすることで、紙の歴史学に新たな一石を投じようとしている。現在龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター、及び里山学術研究センター研究フェロー。



### ■江南和幸さん(古典籍紙分析・研究者) 「紙は時代の目撃者」

#### ●紙の観察と分析方法

阪大の時には、光学顕微鏡、電子顕微鏡、X線を使い分け、形状記憶合金などの金属組織の研究をしていました。何故そうするかというと、ほんの些細な物質や配列が、その合金の性質を決定するからです。

龍谷大学に理工学部ができる時に移籍しましたが、暫くすると当時の学長、「敦煌学」の上山大峻氏に、「大谷探検隊(二〇世紀初頭、西本願寺派大谷光瑞が組織)が敦煌から持ち帰った文書の中には偽物も多くあると言われている。まずは偽物かどうか調べて欲しい。」と持ちかけられました。そこで、デジタルアーカイブ専門の先生と組んで、私は物質そのものの研究つまり専ら紙の研究を始めたのです。

当時は一〇〇倍程度のツァイスの顕微鏡しかありませんでしたが、そのうちにキーエンスの一〇〇〜五〇〇倍まで見えるデジタル顕微鏡を導入したことで、次々と紙の本当の姿が分かるようになってきました。紙も金属と同様、面で見て、様々な倍率で少しずつ焦点を変え、観察することがとても重要です。和紙の世界には幾人かの権威ある先生がおられて、今の研究者達はその先生の言葉をそのまま信じて言わば伝聞の情報で紙を語っています。

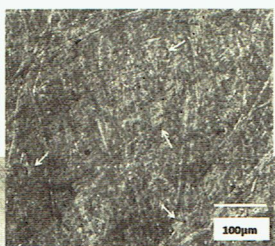
#### ●紙が目撃したこと

ポルトガルのイエズス会がキリスト教布教のために出版した「キリシタン版」に、当時の豪華本「奈良絵本」と同等の上等な鳥の子紙が使われたことは、東洋文庫の私どもの調査で明らか

にし、発表しました。

バテレン禁止令後の紙の貿易についても、一六三〇年代に、一五〇〇枚以上の鳥の子紙が平戸からオランダに輸出された記録が残っています。レンブラントが日本の紙を使っていたというのは、新村出さん(言語学者、文献学者)が初めて言いだして以降、みんなオランダへ行っても見た目は「雁皮紙らしい」と、言わば伝説として伝わっていました。

IPH (国際紙研究者協会)のファブリアーナ・アマルフィ会議(2014年)で「ヨーロッパ人と和紙の出会い-イエズス会からレンブラント」を発表



キリシタン版「ドチリナ・キリシタン」(1592年天草で発行)の表紙と紙の組成(矢印は米粉)



エルミタージュ美術館のレンブラントの銅版画の何点かには日本の紙が使われていると聞き、学芸員のエレナ・シユシコワさんと共同で調べた所、果たしていくらか楮も入っているも

の(これは漉き舟の中に残っていた楮と推測できる)米粉入りの雁皮が使われていたことが証明でき、イタリアの紙会議で発表しました。中国の四六世紀くらいにオアシス植民地トルファンの文書の紙には、粟の茎、粒、表皮、剛毛などが入り、粉を入れてなめらかにしています。粟の栽培起源が中央アジアという事とも一致します。比叡山の三代目座主、円仁の「入唐求法巡礼行記」には、中国の北方では米の値段は粟の四倍するので、人々は粟を主食としてと書いてあり、紙の材料として手に入りやすい材料だったと思われまます。

紙は古くなればなるほど、いろんな植物の痕跡や混ぜ物が入っています。紙の材料になるような植物については、実物を調べ、その標本写真を撮って、比べながら観察するのが私の真情で、化学よりもむしろ植物学の知識が必須です。読んで解明するテキスト学があるなら、私の「紙学」は、時代を目撃している紙そのものの緻密な観察から始まります。そうすると、紙が作られた時代、何故その紙が必要だったのか、紙を使った当時の経済・文化・社会全般の事情まで見えてくるのです。

#### ●アジアの紙の発信力を世界に

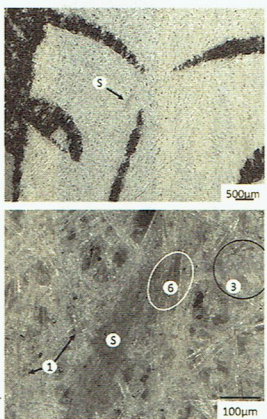
紙の歴史というのは実に壮大なドラマです。アジアは確かに中国の紙の製法の恩恵を受け、それぞれの植物で紙を作っていた。日本には楮があり、中央アジアには穀物があり、中国には竹や米の茎で作るといふ具合に、紙の一大王国が築かれる。

啓蒙時代のデイドロやベーコンが認識する以前に、アジアでは、紙は文化を伝えるモノだという認識を誰もが持っていて、そういう意味で

はアジアの文化は中世末〜近世初期まで、断然ヨーロッパを抜いていました。かたやアラブ人も含めてヨーロッパ人は、一九世紀後半パルプが作られるまで、ずっとボロ布からしか紙を作る事ができなかった。

一七〇〇年以降の大量出版された、いわば庶民向けの江戸と上方の刊本に使われた紙の分析をしてみると、江戸の紙は、「楮十藁十米粉」、上方の紙は「楮十三極十米粉」、半流し漉きです。藁も三極も楮繊維の隙間をうまく埋めて、紙の密度

を高める効果があ  
り、しかも  
も飢饉の  
多かつた



葉やたつぶりの米粉が入っている国芳「絵本四十八癖-いやみやみをいふ癖」全体と拡大写真

時代に恐らくは酒米の研ぎ汁などを利用して、たつぶりと米粉を使って、滑らかにし発色のいい印刷を試みたことが伺えます。人々は用途や社会状況に応じて自在に様々な紙を作り分け、本作りにも活かしたのです。世界的に見ても日本は世界に冠たる出版大国でした。この様なアジアの紙の知恵を世界に発信することは、西欧の紙研究にも大いに刺激を与えることとなります。まず、アクセス可能な博物館の紙や古文書など身近な紙から、証拠を蓄積し、「和紙が語ること」に耳を傾けて頂きたいと願っています。

■韓紙工房「コムコミ」

身近な生活用品に活かす伝統の韓紙工芸

<http://hanji-km.com/>

韓紙(ハンジ)とは、楮を原料に、韓国独特の技法で作られた手漉き紙のことで、日本の和紙にあたる。韓紙工房「コムコミ」(韓国語で『丁寧』という意味)と韓紙工芸材料・韓国伝統雑貨を売る「福巾着(ポチュモニ)」を運営している金雅子さん(奈良市在住)に、生活の場での韓紙の使われ方、技法、文化などについて伺った。

●韓紙工芸

韓紙は、三国時代(紀元前)〜紀元後七世紀頃/日本では弥生・飛鳥・奈良時代(頃)に生産され、書写用としてはもちろん障子や壁、床に貼る紙など、インテリア内装材に取り入れられていた。また、箱などの小物から、机、鏡台、筆筒などの家具にまでいたるまで、様々なインテリア調度品や生活雑貨にも用いられており、「韓紙工芸」と呼ばれる。



金雅子さん

雅子さんが、韓紙工芸に出会ったのは、一九九二〜二〇〇五年、ソウルでコンピュータ関連の会社勤めをしていた時の事だという。「韓国の物は派手過ぎて、普段の生活に馴染まない」と思っていたのですが、韓国最大のお寺『曹溪寺(チョゲサ)』近くのインサドンという通りの韓紙工芸品店を見て、全然派手ではなく、むしろ親しみや懐かしさがあり、お洒落な感じで、素敵だなあと思っていたのです。「韓国語がだいぶできるようになったこともあり、雅子さんは日本への帰国前に、縁のある韓国の工芸品を習ってみようと思いついた。韓紙工芸教室に通い始め、土台製図の基礎から約

二年間習い、帰国後の二〇〇八年、当工房を開設。現在近畿圏のカルチャー教室などで教えている。

●技法と工芸を支える背後の産業

韓紙工芸は、十三〜十八世紀頃(日本では室町〜明治時代)に盛んに作られた。代表的な技法は、使い古しの紙や書物の紙を紙縋りにして、カゴのように編む「紙縋(チスン)工芸」、使わない紙を再度水に溶かし、型に何



紙縋りて編む「紙縋(チスン)工芸」

度も張って乾かした分厚い紙に漆を塗る「紙戸(チホ)工芸」、小刀で伝統模様の装飾を施した「剪紙(チョンジ)工芸」の三つ。現在では、紙縋や紙戸工芸は学ぶ場所が少なくなりましたが、切り絵細工の剪紙工芸⇨韓紙工芸は、身近な家庭手芸として広く親しまれ、教室も多くある。作風によって流派のようなものもあるそう。

予め機械で形に切られた土台のボール紙を、まずボンドで組み立て、下張り用の白い紙に澱粉糊をぬり、よく吸い込ませ「乾いては張り、張っては乾かす」を繰り返す。土台紙には、通



奈良町物語館での教室展示会

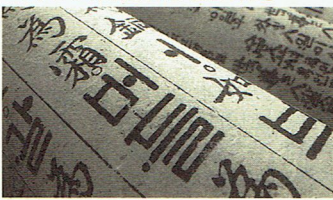
常三mm厚以上のプレス加工されたボール紙が使われ、ロット数も最低五百以上は作らないと採算が合わないのが、教室組織による販売が必要で、その製造は一大産業となっている。「土台作りから教える教室もあるのですが、多くの人は多種多様な既成の土台紙を買って、韓紙を張り、切り紙装飾をして作品を作ります。私は、韓紙工芸がポシャギほど拡がらない原因のひとつは、この土台紙が重いことにあるのではと思っています。送料も高くなりますし、何しろ、それはそれは重くて、持ち運びにとっても苦労しているのです。(笑)」

風通しの良い所で充分乾燥させるが、韓国は日本より寒く、オンドルが発達しているので、カビが生えることはまずなく、気候風土が技法に影響を与えていると言えよう。

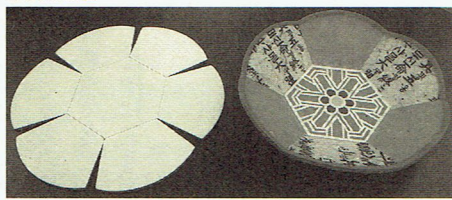
●切り絵に使う韓紙

上張りや装飾切り絵に使う韓紙には、色紙、千代紙風の模様、唐紙風の模様、透かし模様など、和紙に似たものもあるが、ハンゲル文字を印刷している「古書韓紙」と呼ばれる紙もあり、これは韓紙独特のもの。和紙より厚みのある韓紙の標準的なサイズは約九十三×六十三cmで、一枚二〜三〇〇円くらい。上張りの上から、様々な切り絵で装飾するのも

ハンゲルが印刷された「古書韓紙」



厚紙の土台

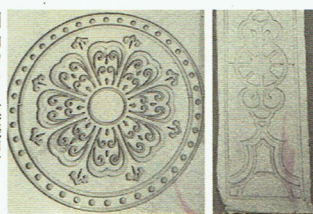


取組紹介

■抗ウイルス漆喰和紙「和蔵紙」の開発  
 関西ペイント+和プラス+越前和紙のコラボ

●優れた「漆喰」の機能

日本の伝統的な家屋の壁に使われてきた「漆喰」には、実は人間の健康を守る優れた効果があるのをご存じだろうか？  
 漆喰の主成分、消石灰（水酸化カルシウム）は、塗ると表面に無数の微細な穴ができ、水と反応することにより強いアルカリ性を示す。そこにウイルスが吸着すると細孔内部の高アルカリ状態が、ウイルスを不活性化させる。細菌、匂いの成分、カビなども同様の仕組みで細孔に閉じ込め、最後は死滅させてしまう。鳥インフルエンザの消毒に使われる白い粉も消石灰だ。漆喰は西洋でも使われ、中世ヨーロッパのベスト大流行時には、人々は漆喰壁の白い教会を避難場所とした。



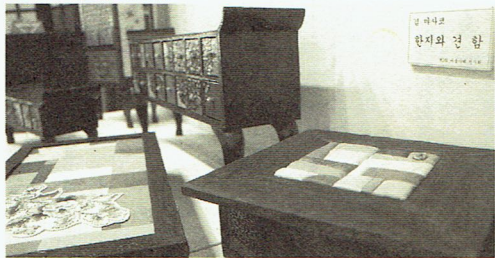
凹凸のある模様型

韓紙工芸の真骨頂。縁起のいい「双喜（サンヒ）」模様、多産を表す「コウモリ（バクチャー）模様」、生命力の象徴「蓮模様」などの伝統柄があり、昔は娘の嫁入りを持たせるチマチョゴリの衣装箱などに幸せを願って模様を付けた。立体的な装飾を施すための紙粘土の模様板も、既成の型を用いて簡単に作る事ができる。凹凸模様の板の上に韓紙を張り、凸部分を漂白剤で脱色してわざとアンティーク風に見せる「古色韓紙工芸」技法が最近人気なのだそうだ。

紙漉きは、日本と同じように楮の木がある山と水のきれいな川がある所が産地。有名なのはウオンジュ（原州）、チョンジュ（全州）、アンドン（安東）、チリサン（智異山）。産地のブランドロゴを韓紙に表示している紙もあり、「韓国産韓紙を使いましょうー」というTVCMまであるそうだ。

「韓紙工芸は小学校の授業にも取り入れられていて、誰でも知っています。生徒さん達は、今の生活に合うワインボトルラック、スマホスタンド、照明器具などのインテリア品から小箱やブローチなど、何でも作れるのが楽しいとおっしゃいます。」と雅子さんは語ってくれた。

インテリアの家具や小物まで作る韓紙工芸  
 --2013年金雅子制作



果が実証されている。

二〇一六年、同社は「アレシックス」の進化形、紙、シート、布地などの柔軟な素材にもひび割れすることなく塗布できる「アレシックスイモソティアート」を発売した。世の中には、単一で抗菌、防カビをうたった製品も多いが、この漆喰塗料は、消臭・抗菌・抗ウイルス・揮発性有害物質除去・調湿機能の複数の効力を併せ持つ環境改善塗料なのだ。



消臭効果を体感できる 実験キット

●連携した「和蔵紙」の開発

二〇一七年、「アレシックスイモソティアート」を使った新しい商材、漆喰和紙壁紙「和蔵紙」の開発は、福井県の「産学官金連携技術革新推進事業補助金」の対象事業に採択され、約二千万円の助成を受けた。

開発に際して連携したのは、プロジェクトリーダー役と販売の（株）和プラス（福井市）、漆喰塗料をコーティングしやすい難燃性紙の開発を受け持った機械抄き和紙メーカー（有）小畑製紙所（越前市）、和紙への塗料コーティングを受け持った清水紙工（株）（越前市）の三社。その他にも県工業技術センターや関西ペイント（株）、コーティングした和紙に印刷を施す（有）笹尾印刷所（鯖江市）の協力も加わっている。

「和プラス」の社長市橋勝氏は、元々関西ペイントの北陸エリアの販売代理店に長年勤務した経歴を持つ。旧今立町出身ということもあり、コラボする紙製造、紙加工の候補選定の情報には事欠かなかった。

紙作りを担当した「小畑製紙所」は、ICタグ入り和紙や恐竜ペーパークラフト「わしのザウ

ルス」を製造している機械抄き和紙メーカー。社長の小畑明弘さんは、紙を中性紙にすることが難しかったと語る。酸性紙では漆喰塗料を塗っても中和して効力を発揮することができない。「機械抄きのサイズ剤は基本的に酸性紙で対応しているのですが、中性紙にするには普通のサイズ剤ではダメで、使ったことがなく、調合が難しかった。最初はサイズ剤が効かず、抄紙機械のフェルトや網に至るまで、使っている酸性サイズ剤が染み込んでいたことが原因と分かった」と苦労を語る。

塗料のコーティングを担当した「清水紙工」は、「柿渋を加えた抗菌・防腐・消臭効果のある和紙」「環境に優しい水に溶ける和紙」などを手掛け、小ロットにも対応する紙加工技術の得意な会社。「コーティングする塗料はエマルジョンタイプ（水性）で、中性紙は紙自体も水分を含むのが早いので、普通のロールに通すと紙にストレスがかかり、破れやすい。そこでロールで抑えずに紗を使いロータリースクリンで転写する方法を採用し、模様付けもこの方法で行った」と清水一徳さんは語る。

「和蔵紙」を使用した造花・消臭対策シート・壁紙見本



最終段階の紙への印刷は、笹尾印刷所。通常の

印刷では漆喰の目が埋まつてしまい、機能が失せる。そこで水性インクでありながら、耐候性がある環境にやさしいインクを採用。

●今後の展開

「和蔵紙」の機能耐用年数は壁紙で五〜八年、価格は四五〇〇円/mで高めたが、ウィルスを気にする病院、介護高齢者施設、学校などの特殊施設には良い。住宅や建物でも、トイレや天井、腰板など、一部分に使うことで、その効能を体感してほしいとの思いもある。

また、密室で臭いのこもりやすいタクシーやレンタカーの天井に張って、広告や観光マップも兼ねるシートは、二八〇〇円/枚。一台当たり二枚使用で消臭効果持続期間は約六カ月を想定。その他にも、病院に飾る造花、消臭袋、扇子などを試作している。

「何しろ目に見えない効能をアピールして、売り込むのが難しい」と市橋社長。消臭効果をその場で体感できる「臭い実験キット」も考案したが、効能を分かりやすく説明する動画配信の必要性を強く感じているという。事務所にはあの手この手のアイデアあふれる試作品が並んでいた。



ノベルティグッズ(扇子、消臭袋、折紙)



■愛知県大で学術講演会「紙の道の文化史 正倉院からサマルカンドまで」開催



柴崎教授が用意した紙の伝搬マップ 講演を行った杉本氏 柴崎氏



去る十月十三日、愛知県立大学長久手キャンパスで、愛知県立芸術大学十愛知県立大学の共同企画、学術講演会「紙の道の文化史」が開催され、約一五〇人の参加があった。

講演では、まず愛知県芸大の柴崎氏が東西の様々な材料から作られた紙見本と伝播経路をコンパクトにまとめたカードを用いて、紙の材料、製造、時代を俯瞰した。続いて、長年正倉院の宝物調査に関わった杉本・樹氏が「正倉院の紙」と題して、収蔵されている紙素材の宝物、及び紙の第一次調査(昭和三十五〜三十七年)、第二次調査(平成二七〜二〇年)の状況について述べた。併行して、同大学図書館では、サマルカンド紙の復元紙を始め日本、中国、ヨーロッパ、アフリカ等、古今東西の紙も展示された。

当講演会の後、十月から来年一月まで、一か月に一回のペースで連続公開講座も用意されている。内容は「紙の誕生とその伝播」、「紙の芸術と歴史・文化」、「紙の文化財と修復」、「日本文学と紙」となっており、多彩な講師陣が講演を担当する。

(詳細:「愛知県大地域連携センター 紙の道」で検索)

情報欄

●イベント情報

■第35回伝統的月間 国民会議全国大会 福岡大会

・全国大会・記念式典  
時:平成30年11月1日(木)  
場所:アクロス福岡(福岡市)

・第37回全国伝統工芸士大会

時:11月1日(木)  
場所:アクロス福岡

・合同懇親会

時:11月1日(木)  
場所:ホテルオークラ福岡

・伝統工芸ふれあい広場、全国くらしの工芸品展、日本伝統工芸士会作品展

時:11月2日(金)〜11月4日(日)  
場所:マリンメッセ福岡

■平成31年 越前和紙祈願祭・漉き初め式

時:平成31年1月5日(土)9:00〜  
場所 卯立の工芸館

■平成31年 新年賀詞交換会

時:平成31年1月5日(土)11:00〜13:00  
場所:生涯学習センター今立分館

■越前和紙展〜「テーマ未定」

時:平成31年2月18日(月)〜23日(土)  
場所:東京日本橋「小津ギャラリー」

●「RENEW(リニュー)」終了

2018年10月19日〜21日、開催された、作り手と直接繋がる体験型マーケット「RENEW(リニュー)」



には、和紙メーカー14社、和紙施設3ヶ所が参加し、本年も無事終了いたしました。ご来場下さった皆様、ありがとうございました。

●新刊紹介

「和紙植物」(ものと人間の文化史)  
-岡岡利幸著  
-2018年9月  
-法政大学出版局刊、3,348円  
紙が漉かれ始めた奈良時代以降から現代まで、これら原木の育成から伐採、皮剥ぎまでの工程を中心に、生産者たちの苦闘の歴史を描き、生産地の過疎化・高齢化、野生獣による被害の問題にもおよんで和紙の未来に警鐘を鳴らす。



編集後記

日本、中国、韓国の紙の国際シンポジウムに十年前に参加したことがあるが、学術的な話は別にして、家庭生活の中での紙にずっと興味があった。今号では韓紙工芸の現在の様子を伺うことができ、日本と似た所、違う所など、改めてアジアの紙の多様性を感じた。(よ)

季刊・和紙だより 第60号(2018年秋号) 発行日:2018年11月2日 和紙だよりURL→<http://washidayori.jimdo.com/>

発行人:福井県和紙工業協同組合 石川浩 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142

編集所:Office YOMOSA 〒520-0025 滋賀県大津市皇子が丘1-6-6 #209 Tel/Fax: 077-523-4172 E-mail: myomosa@mx5.canvas.ne.jp

編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子 印刷所:有限会社新進堂印刷所(京都府宇治市) 用紙:機械漉き大札紙(石川製紙株式会社製) ※無断での転写・転載はお断りします。